

同時開催

大好きなトットリの「未来」を切り撮ろう! 新発見! 再発見!!
「鳥取フォトキャラバン」

小中高校生や地域の方々身近な自然を舞台にデジタル一眼レフカメラで写真を撮影し、トットリの魅力を伝えていくプロジェクト「鳥取フォトキャラバン」の作品をそれぞれの会場で展示します。日本の原風景に溢れるトットリの魅力を子どもたちは「新発見」し、大人たちは「再発見」する世代と地域、文化と歴史をつなぐ「地域交流型」の取り組みです。

鳥取フォトキャラバン 代表 水本俊也(写真家)



特別協力:キヤノン株式会社

TOTTORI LIVE YELL project

終了した公演は、下記の「鳥の劇場 Youtubeチャンネル」のアーカイブより記録映像をご覧いただけます。

米子公演

合唱
×
演劇

山陰少年少女合唱団リトルフェニックス × 鳥の劇場



山陰少年少女合唱団 リトルフェニックス



岡野貞一

【第1部】山陰少年少女合唱団 リトルフェニックス
第15回定期演奏会

【第2部】「岡野貞一物語 ふるさとのかなた」
～終わらない戦争、作曲家の祈り～

倉吉公演

クラシック
×
演劇

オーケストラ・オペラ × 鳥の劇場



指揮者 大浦智弘



W.A.モーツァルト

【第1部】「鳥取で生まれたクラシック」

【第2部】「モーツァルト、四大オペラと人生」
～歌と芝居、管弦楽で綴る
オーケストラ・オペラライブ～

「鳥取公演」の記録映像はご覧いただけません。

ライブ配信・記録映像の視聴について

公演当日はライブ配信を、公演終了後は記録映像をお楽しみいただけます。

詳しくは下記「鳥の劇場 Youtubeチャンネル」もしくはホームページ(<https://tottori-liveyell.jp>)をご覧ください。



ライブ配信 Youtubeチャンネル 「鳥の劇場 YouTubeチャンネル」よりご視聴いただけます。

【お問合せ】 TOTTORI LIVE YELL project 実行委員会 事務局
〒689-0405 鳥取県鳥取市鹿野町鹿野1812-1(鳥の劇場内) TEL.0857-84-3268

主催/文化庁 公益社団法人日本芸能実演家団体協議会 TOTTORI LIVE YELL project 実行委員会
実行委員会/特定非営利活動法人 鳥の劇場、公益財団法人 鳥取県文化振興財団、新倉 健、鳥取JAZZ、
山陰少年少女合唱団リトルフェニックス、一般財団法人 米子市文化財団、日本海テレビジョン放送株式会社、
株式会社新日本海新聞社、日本海ケーブルネットワーク株式会社、株式会社FM鳥取、
株式会社エムアンドエムドットコー、鳥取県地域づくり推進部文化政策課



主催/文化庁 公益社団法人日本芸能実演家団体協議会 TOTTORI LIVE YELL project 実行委員会



TOTTORI LIVE YELL Project

JAZZ
×
演劇

ライブへのエール。
ライブからのエール。

鳥取JAZZ × 鳥の劇場

2020.12.26(土) 開演 19:00
会場/とりぎん文化会館 梨花ホール

音楽×演劇で、
鳥取をもっと元気に。
もっと笑顔に。

JAPAN LIVE YELL project

ライブへのエール。 ライブからのエール。

ステージを奪われた表現者たちがいる。
それでも、届けたい想いをずっと抱えてきた人たち。
いまこそ彼らに、観るというエールを贈ろう。
そして、私たちも気づいたはずだ。
泣いたり、笑ったり、歌ったり。
そんな時間こそが、生きることそのものだったと。
ライブへのエールを贈ること。
それはきっと、ライブからエールをもらうこと。
人とライブのエール交換が、
日本全国で、いま幕を開ける。

JAPAN LIVE YELL project

新型コロナウイルスの感染拡大により、この春、世界から突然「ライブ」が消えました。
徐々に文化芸術活動は再開しているものの、未だ深刻な状況が続いています。

「JAPAN LIVE YELL project」(ジャパン・ライブエール・プロジェクト)は、文化庁、芸団協、そして全国27都道府県の文化芸術団体が連携し、私たちの暮らしにもう一度ライブを取り戻す後押しをする、緊急プロジェクトです。全国各地で、地域の特色を生かした個性豊かなイベントが延べ500本以上展開される予定です。リアルな会場での参加だけでなく、オンライン配信を活用して多くの方にご参加いただけるプログラムも企画されています。

新しい生活様式のもと、全国各地の芸術家やスタッフ、文化芸術に親しむ愛好家・子供たちは、かつてないチャレンジに取り組んでいます。知恵を出し工夫を重ね、舞台の幕を開け始めています。ライブを愛する皆さんと、もう一度感動と喜びを分かちあうために。あらゆる立場の人々に、ライブでエールを贈るために。

ぜひもう一度、ライブの醍醐味に触れてください。きっと新しい出会いが見つかるはずです。リアルやオンラインでの参加を通して、魂を揺さぶるステージを届けてくれる表現者やスタッフへ、みんなでエールを贈りましょう!

◆名称
JAPAN LIVE YELL project
ジャパン・ライブエール・プロジェクト

◆参加27地域
北海道、岩手県、秋田県、山形県、埼玉県、東京都、神奈川県、新潟県、石川県、長野県、愛知県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、鳥取県、島根県、広島県、愛媛県、高知県、福岡県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、沖縄県

◆期間
2020年8月～2021年3月

◆主催・協力
主催：
文化庁／公益社団法人日本芸能実演家団体協議会
27都道府県の実施主体
協力：
劇場、音楽堂等連絡協議会／公益社団法人全国公立文化施設協会
公益社団法人日本オーケストラ連盟
※文化庁令和2年度戦略的芸術文化創造推進事業



中島 諒人

鳥の劇場 芸術監督

菊池 ひみこ

鳥取JAZZ実行委員会委員長

特別対談

TOTTORI
LIVE YELL
project



中島:今回ジミー・アラキさんに焦点を当てたのは、お父さんが鳥取ご出身だということはあると思いますが、やはりジャズの歴史の中で重要な役割を果たした人だということでしょうか。

菊池:GHQから入ってくる情報は、当時の日本のミュージシャンにとってすごく大きくて、その中にジミーさんもいました。実際に日本のミュージシャンにいろいろ教えていったところで、そういう方がいたというのは、日本にとっても重要なポイントだったんだと思います。これは秋尾さん(この芝居の原作「スウィング・ジャパン」作者)の著書で知ったことです。以前から名前はなんとなく聞いた事はあったんですが、まさか鳥取にゆかりのある方とは。

中島:サクソ奏者の五十嵐明要さんをお呼びになります。

菊池:芝居の中にも少し出てきますが「モカンボ」という喫茶店があって、そこが日本のビバップの巣窟というか、ミュージシャンが仕事終わりに集まっては朝までセッションを繰り上げた場所だったんです。そのモカンボで行われたセッションを19歳の青年がこっそり録音していたものがあって、お仕事でよく一緒だったドラマの清水潤さんが、ある日すごく大きなカセットデッキを持ってきてそれを聞かせてくれたんです。これ演奏しているの誰だと思う?と聞かれたけど、どう聞いても日本人の演奏には聞こえなかった。ところが「これ、俺だよ」と言うのでびっくりしました。日本にそんなセッションが繰り広げられた時代があったのを私はその時に初めて知りました。そのモカンボセッションに五十嵐さんは実際に参加されていたんです。個人的な接点も少しありながら、やはりモカンボの話が開けるのは五十嵐さんの世代が最後かな、と思いましたし、生の演奏も皆さんに届けたいと思ったのが大きな理由ですね。クレイジーキャッツのハ

ナ肇さんがモカンボセッションの発起人だとか、植木等さんが会費を集めたとか、その清水さんの刑務所出所祝いだったとかいろいろ逸話があります。

中島:我々が演劇を語るとき、「演劇は、そこに生身の体と声があって、見えるものから見えないものを想像させていく。それが演劇だ」と言ったりします。菊池さんにとって「ここがジャズのコアだ」という部分は?

菊池:自分自身の言いたいことや表現したいことが一番先にあり、そこに「場」というのがあって、他のミュージシャンもいて、お客さんもいて、今日この瞬間に何をどういう風にみんなに伝えるのかというのが一番神経を使う部分で、そこで出来上がっていく音楽なので、同じ曲を今日やるのと明日やるのでは全然ちがうものになるんです。それはやっぱり各ミュージシャンがその日過ごしてきた時間もちがうし、色んなことに会ったりいろんなことが起きたりして精神状態がちがってくる。そういう中で同じ曲をやってもやっぱりちがう結果になる。そういう対話みたいなものがアドリブの中でずっととされていて、それにお客さんの反応も加わってきて盛り上がっていく時もあればどっと深く沈んでいく時もある。そうやって作り上げていくのがジャズです。

中島:「日本のジャズ」の特徴というのはあるのでしょうか?

菊池:去年デトロイトジャズフェスティバルに行きました。その時に感じたのは「アメリカの真似をするんじゃない、自分の言葉で語れる」ということが評価されるんだということでした。私は岡野真一の「ふるさと」を持っていてやったんですけど、そこはやはりすごく大事にすべきことであって、表現の一部がジャズの手法であったとしても日本人として何を訴

えていくかというのは今すぐ問われているのだと思います。

中島:そこで菊池さんや松本さんが鳥取でジャズをやっていることに意味が出てくる。

菊池:まさにそれです。私が鳥取でジャズフェスティバルをやる時に「鳥取JAZZ」と命名しました。「鳥取のジャズ」という意味なんですよ。そこが大事だと思っていて、「いやもう俺たちなんか」とみんな後ろ向きにおっしゃってたんですが「いやそうじゃない!」。鳥取は鳥取のジャズをやればいんだと。レベルの問題ではなくて。そういう意味で鳥取JAZZを始めたし、日本のジャズと同じように鳥取のジャズ、各県のジャズがあってもいいと思います。だから言葉なんですよ、結局。方言があるように、言葉がちがえば表現もちがう。

中島:コロナの状況で考えたことは?

菊池:別に音楽必要ないよね、という風に言われちゃうと、そういう気持ちにやる方もなった部分があって。でも実は生きてるってそういうことじゃないでしょ。人間が人間として生きてく上でやっぱりただ食べて動いていればいいのではなくて、そこに人間として生きてる意味とか喜びとかそんなものがない意味がないじゃん、ということにちょっと気がついて「こんな時代に好きなジャズなんかやっていいの?」みたいな感じもあったんだけど、私はそうじゃないと思うよと言って。5月に鳥取JAZZ10周年で無理やりコンサートをしたんです。やれる人はやらなきゃだめだ。だって演奏したくてもできない人はできない、聴くしかない。演奏できる人はするべきで、それを聞いてもらうということが、私自身は使命だと思っているので、やっぱりそこはやめちゃダメよとみんなに言ってます。

鳥取JAZZ



撮影:常盤武彦

鳥取在住のミュージシャンや音楽愛好家が企画・運営して2011年より毎年開催されるJAZZイベント。プロのジャズミュージシャン、ジャズを題材に作品を作り続けているアーティスト、大学のJAZZ研究会や地元ミュージシャンが活発に活動していることを活かして、「ジャズ」と「アート」の2つの軸をコンセプトに開催。
2019年からは世界3大ジャズ・フェスティバルであるデトロイト・ジャズフェスティバルとの交流も行っている。

One Night Dream BIG BAND

スペシャルゲスト / 五十嵐明要

1932年東京都中央区八丁堀生まれ。日本ジャズ界偉才のアルト・サクソフ・プレイヤー。「シャープス&フラッツ」「ブルー・コーツ」「小原重徳とジョイフル・オーケストラ」と、一貫してビッグ・バンドのコンサートマスターを務めた。その人間味溢れる感性と、豊かな表現力に支えられた円熟のプレーに対して、数多いジャズ・サクソフ奏者の中で“ONE AND ONLY”と称されている。2018年、日本を代表するジャズ奏者として文部科学大臣から表彰される。音楽生活70周年を迎える五十嵐明要の活躍に対し、今、国内外を問わず大きな期待と注目が寄せられている。



ゲスト奏者 (from TOKYO)



稲垣貴庸



斎藤クジラ誠



近藤和彦



辻野進輔



奥村晶



平尾孝夫

- ◆ ドラムス : 稲垣貴庸
- ◆ アルトサクソフ : 近藤和彦
- ◆ トランペット : 奥村 晶
- ◆ ベース : 斎藤クジラ誠
- ◆ アルトサクソフ : 辻野進輔
- ◆ トロンボーン : 平尾孝夫

鳥取の奏者

- ◆ ギター : 松本正嗣
- ◆ ピアノ : 菊池ひみこ
- ◆ テナーサクソフ : 中務敦彦 (from岡山)
- ◆ テナーサクソフ : 秦野 勲
- ◆ バリトンサクソフ : 金山晃久
- ◆ ヴォーカル : 伊藤誉子
- ◆ トランペット : 前野庸平 (from豊岡)
- ◆ トランペット : 井上拓美
- ◆ トランペット : 渡辺悠希業
- ◆ トロンボーン : 五十嵐啓道
- ◆ トロンボーン : 漆原良次
- ◆ トロンボーン : 日野望絵瑠



菊池ひみこ



松本正嗣

鳥の劇場

出演者

後藤詩織
(ちくさ)大川潤子
(ジャズクラブマスター)高橋等
(酔っ払い)

2006年設立。演出家中島諒人を中心に俳優や技術スタッフなど演劇人が、自分たちの力で鳥取市鹿野町の使われなくなった小学校や幼稚園の施設を劇場に変え、NPO法人として運営。演劇の力と常駐する専門家集団の力を核とし、現代演劇の作品の力と劇場という場の力を通じて、様々な社会的実践を重ね、全国、そして世界からも注目を集めている。「創る」「いっしょにやる」「試みる」「招く」「考える」「成長の支援」の6つのプログラムを事業の柱とし、コミュニティーの中に劇場と現代演劇があることの社会的な可能性をさまざまに模索している。



外観 2016年に鳥取市、鳥取県により改修



2008年から毎年開催している国際演劇祭「鳥の演劇祭」



学校でのワークショップの様子



障がいのある人といっしょに舞台を作る「じゆう劇場」

プログラム

「スウィング・ジャパン」

～日系二世ジミー・アラキの生涯と日本ジャズ秘話をめぐって～

原作／秋尾沙戸子『スウィング・ジャパンー日系米軍兵ジミー・アラキと占領の記憶』（新潮社刊）

あらすじ

ジャズについてのレポートを課された大学生。全く書けないで悩んでいる彼女は、地下のジャズクラブに迷い込む。そこには、ジャズに詳しいマスターと、ジミー・アラキへの尊敬が昂じて、自分をジミーだと思いついた変な酔っ払いがいた。未知の音楽ジャズに触れるうちに彼女は……。

曲名

- 1.「ムーンライト・セレナーデ」
- 2.「シング・シング・シング」
- 3.「My Blue Heaven」
- 4.「Things Ain't What They Used to Be」
- 5.「In a Mellow Tone」
- 6.「Lester Leaps In」
- 7.「Bebop」
- 8.「死刑台のエレベーター」「危険な関係のブルース」
- 9.「Moanin'」
- 10.「A Night in Tunisia」
- 11.「Hang Up Your Hang Ups」

ジミー・アラキ (ジェイムス・T・アラキ)

James T. Araki, 1925年～1991年

1925年アメリカのソルトレイクシティで生まれ、ハリウッドで育つ。高校在学中に太平洋戦争が起こり、日系人として強制収容所に入れられる。収容所生活中に、ラジオから流れるデューク・エリントンの曲を聞いてジャズに目覚める。学生バンドを組み、ダンスパーティーで演奏。担当はピアノとクラリネット。1946年進駐軍語学兵として来日。通訳および日本語資料翻訳のかたわら空軍ジャズバンドに加わる。南里文雄と出会い、日本のジャズメンと親交。日本でのアメリカンジャズのレコード化問題を、自らが作曲することで解決。三度の来日中に京大や東大で日本文学を研究。川端康成、三島由紀夫ら日本の文学作家とも交流。井上靖、山崎豊子などの英訳も行う。父は鳥取県日南町出身。



ジャズの歴史

ジャズの発祥

ジャズは黒人奴隷たちの苦悩の歴史の中から生まれた。1619年8月オランダ商人によって、北アメリカのイギリス植民地のタバコ・プランテーションに初めての黒人奴隷が売り渡された。三角貿易の一環として行われた黒人奴隷貿易では多数のアフリカ人が奴隷として新大陸に連行された。

ブルース

Blues (ジャズの母)

19世紀、南北戦争が起こる以前、主に南部の農園などで働いていた黒人奴隷が過酷な労働の合間に、自分達の苦悩や、悲しみなどの感情を歌で表現したのが初期のブルース。

ニューオーリンズジャズ

New Orleans Jazz (1910年頃～)

集団即興と言って、クラリネット、トランペット、トロンボーンなどの管楽器が演奏の中で自由に絡み合う賑やかなスタイル。ルイ・アームストロングはソロプレイを普及させ、後のジャズのスタイルを決定付けたと言える。
♪ デュークス・オブ・ディキシランド「When the Saints Go Marching In」など

ビー・バップ

Be-Bop (1940年頃～)

ビッグバンドで毎晩ダンスの伴奏をやっていることに飽きてしまった先進的なミュージシャン達が、仕事の後にハーレムのジャズクラブに集まり、朝までジャムセッションを繰り上げたのが始まり。小さい自由な編成でアドリブが主体のジャズ。
♪ チャーリー・パーカー「Ornithology」など

ハードバップ

Hard Bop (1955年頃～)

1950年代になり演奏者がそれまでのビー・バップのスタイルに飽き足らず、曲のコードをより細かくしたり、テンポを速くして演奏をより複雑にしたスタイル。
♪ フィニアス・ニューボーン Jr「Daa Houd」など

フリージャズ

Free Jazz (1960年頃～)

1959年オーネット・コールマンが「和音を否定することで、和音に縛られない自由な演奏ができる」というコンセプトの元に創造した新しいアンサンブルの形。
♪ オーネット・コールマン「Peace」など

新主流派ジャズ

New Mainstream Jazz (1965年頃～)

ハードバップやモードジャズなどの良いところを残しつつも、新しいサウンドを求め、フリージャズのようないわゆる理解し難い音楽とも異なるスタイル。演奏は繊細な美しさを持っていないが、モードジャズのような堅苦しさを感ぜさせない。
♪ ハービー・ハンコック「Maiden Voyage」など

1890 ラグタイム

Ragtime (1890年頃～)

アメリカの黒人ピアニストたちが、ラグタイムという演奏スタイルを流行させる。このスタイルは決してスウィングはせず、アドリブもないが、結果的にアフリカ音楽と西洋音楽が融合されることになる。
♪ スコット・ジョプリン「エンターティナー」など

1910

1930 スウィングジャズ

Swing Jazz (1930年頃～)

10～20人程度のビッグバンドと呼ばれる編成が定着し、主に白人達の集うダンスホールなどで演奏されたスタイル。1938年にカーネギーホールで行われたベニーグッドマンの演奏は、白人社会の中でジャズが市民権を得た瞬間であった。
♪ ベニーグッドマン「シング・シング・シング」など

1940

1950 クールジャズ

Cool Jazz (1950年頃～)

ビブラートをきかせた濃厚なスタイルに対して、ビブラートをひかえて抑えたサウンドにしたスタイル。1940年代終り頃、ビー・バップのスタイルはほぼ完成し、それが世間に受け入れられ飽和状態になった1949年、マイルス・デイビスが打ち出した新たなコンセプトである。
♪ ギル・エヴァンス「Deception」など

1955

ウェストコーストジャズ

Westcoast Jazz (1955年頃～)

第二次世界大戦後、映画産業が盛んになり映画音楽への音楽家の需要が高まる。白人を中心とするジャズミュージシャンが映画音楽に本格的に参加し、ジャズが独自の発展を遂げる。この動きをウェストコーストジャズと呼ぶ。
♪ デューク・ジョーダン「No Problem」(危険な関係のブルース) など

モードジャズ

Mode Jazz (1960年頃～)

これまでのコード進行に縛られた演奏からプレーヤーを解放するために、曲のコード進行をなくし、あるスケール(音階)にしたがってアドリブ(即興演奏)をする手法。
♪ マイルス・デイビス「Milestones」など

1965

1970 クロスオーバー/フュージョン

Crossover/Fusion (1970年頃～)

60年代後半になりジャズとロックを融合することが試みられた。電子楽器を使用し、ジャズにブルースやロック、ファンクのフィーリングなどが取り入れられたスタイル。
♪ ハービー・ハンコック「Chameleon」など